

[教育実践研究報告]

産業看護学教育の構築 (第4報)

- QWLの向上を目的とする看護のあり方についての学生の考察 -

梅津美香¹⁾ 上野美智子²⁾ 奥井幸子²⁾Structuring Education on Occupational Health Nursing, Part :
Students' View on Aim of Nursing Improving QWLMika Umezu¹⁾, Michiko Ueno²⁾, and Yukiko Okui²⁾

はじめに

本学における産業看護学教育は「成熟期看護方法1」
として位置づけられ、学習の目的を成熟期にある働く人
びとの Quality of Life (QOL) の中で重要な位置を占め
る Quality of Working Life (QWL) の向上を目的とす
る看護のあり方を学習することに置いている。そのため
に健康と労働の相互関連性を理解し、人と労働・労働環
境の双方に働きかけて健康を維持増進する看護方法を学
ぶことを目標としている。

平成13年より、産業看護学教育の構築に向けて一連の
研究を開始し、報告を重ねてきた¹⁻³⁾。本論文では、教
育の目的である Quality of Working Life (QWL) の向
上を目的とする看護のあり方について、15回の授業終了
時点で学生が考察した記述を分析した結果を報告したい。

研究目的

15回の授業終了時の最終レポート「成熟期にある働く
人びとの Quality of Life (QOL) の中で重要な位置を占
める Quality of Working Life (QWL) の向上を目的と
する看護のあり方」の記述を分析することにより、今後
の授業展開の示唆を得る。

成熟期看護方法1の学習の枠組み

成熟期看護方法1の15回の授業は、表1に示すように
労働生活を構成する『労働環境』『労働態様』『個人要因』
『家庭要因』『健康・安全に関するセルフマネジメント』

表1 労働生活の構成要素

労働環境
労働態様
個人要因
家庭要因
健康・安全に関するセルフマネジメント
産業保健体制
健康に関連する労働の概念

『産業保健体制』『健康に関連する労働の概念』という7
つの要素があり、これらの調和により QOL/QWL の向
上が実現するということを学習の枠組みとして設定して
いる。これらは、第1報の健康と労働の相互関連性の理
解を目的として「成熟期の働く人の仕事と健康の関連に
ついて」インタビューした学生のレポートの分析結果⁴⁾
から得られたカテゴリーを基に、担当教員3名で検討し
作成したものである。この枠組みに基づき、これらがよ
り効果的に学習できること、および本科目が1年次の2
セメスターに開講されていることを考慮し、講義に加え、
労働者インタビュー、事業所見学、作業環境・作業態様
の体験学習、看護職の実践活動紹介等を取り入れている。

今回の分析対象である最終レポート作成の前には、授
業のまとめの一環として、各自インタビューした労働者
の事例を題材に、健康と労働の相互関連性についてグルー
プワークを行い、発表、討議を実施している。なお、
QWL の概念は講義の中で触れているが、その向上を目
的とする看護のあり方については、定まった正解がある
訳ではなく自ら考えることが重要であるとの教育的意図

1) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

から、取り上げていない。従って、学生は、それまでの学習のすべてから総合的に「成熟期にある働く人びとの Quality of Life (QOL) の中で重要な位置を占める Quality of Working Life (QWL) の向上を目的とする看護のあり方」を考察することになる。

以後は Quality of Life は QOL, Quality of Working Life は QWL と略す。

・用語の説明

前段で述べたように、本科目では学習の枠組みの中で、セルフマネジメントという用語を使用している。

本研究では、セルフマネジメントとは「目的・意図を明確にして自主的に効果的な活動を行なうこと」と定義している。自己管理あるいはセルフケアと基本的には同義であるものの、目的・意図を明確にして効果的な活動を行なうことを強調する意味合いを込めて用いている。また、このセルフマネジメントは、個人のみではなく集団のセルフマネジメントも包含しているものとして扱っている。

しかし、学生が自己管理あるいはセルフケア等の言葉を用いて記述している場合には、記述の要約ではそのまま自己管理あるいはセルフケア等のまま表現した。

・対象と方法

1. 研究対象

本研究の対象は、平成14年度「成熟期看護方法1」受講学生の最終レポート中の「成熟期にある働く人びとの QOL の中で重要な位置を占める QWL の向上を目的とする看護のあり方」について考察した記述である。レポートを提出した86名中同意の得られた全員の記述が研究対象となった。

2. 分析方法

- 1) 「成熟期にある働く人びとの QOL の中で重要な位置を占める QWL の向上を目的とする看護のあり方」について考察した記述を熟読し、QWL の向上へのつながりが読み取れる看護の記述のみを前後の文脈も含めて抽出した。
- 2) 抽出した記述を意味内容に沿って要約した。
- 3) 要約した文章を、類似性に従いまとめて、「QWL の向上を目的とする看護のあり方」(以下、看護のあ

り方と略す)として命名した。命名された「看護のあり方」を、表1に示した学習の枠組みとの関係を明らかにするために、各要素と照らし合わせて整理した。

- 4) 分析は、産業看護学担当である研究者3名の討議の積み重ねにより行われた。

3. 倫理的配慮

レポートを研究に用いることについて、15回目の講義終了後、研究目的、個人のプライバシーを保証すること、承諾の諾否が成績に関与しないことについて明記した依頼文書を配布し、口頭で説明し書面にて同意を得た。

・結果

1. 学生が考察した「QWL の向上を目的とする看護のあり方」と学習の枠組み

1) 分析の過程について

「QWL の向上を目的とする看護のあり方」についての考察は、59名の学生より254記述得られた。QWL の向上へのつながりが読み取れる看護の記述がなかった学生は27名であった。

254記述を意味内容から要約し、「看護のあり方」という観点から比較検討しまとめて命名した結果、表2のとおりに、37の「看護のあり方」に分類された(本文中ではにて表示)。さらに分類された「看護のあり方」を表1に提示した学習の枠組みと照らし合わせた結果、7つに整理された(本文中では【 】にて表示)。その際、学習の枠組みの『労働環境』『労働態様』については、厳密に分けて記述した学生が少なく、労働側の要素として労働環境、労働態様を合わせて考察している記述も多かったため、【労働・労働環境】としてまとめた。『個人要因』『家庭要因』についても同様に、労働外の条件として合わせて考察している記述も多かったため、【個人要因・家庭要因】としてまとめた。『健康・安全に関するセルフマネジメント』『産業保健体制』『健康に関連する労働の概念』については、学習の枠組みの通りである。それ以外に、『労働環境』『労働態様』『個人要因』『家庭要因』の相互関連性について着目した看護の記述があり、【健康と労働の相互関連性】としてまとめた。また、ここまでの看護のあり方が、学習の枠組みの7つの要素の1つないし複数に働きかけ結果的にQWL の向上につながるという記述であるのに対し、QOL/QWL の向上を

目的とする看護とは、という観点で記述された文章を【QOL/QWLの向上】としてまとめた。

2) 【労働・労働環境】

【労働・労働環境】には、5つの看護のあり方 健康への悪影響がないように適切な労働・労働環境を整える 労働者の健康と企業利益の両立を考慮して労働・労働環境を整える 職業上のストレスを軽減する 労働者の個別性を考慮して労働・労働環境を整える 快適さに配慮した労働・労働環境を整える が含まれる。

3) 【個人要因・家庭要因】

【個人要因・家庭要因】には、6つの看護のあり方 働くために健康の維持増進をめざし予防的な活動を行なう 健康障害を持つ労働者が働けるように支援する 個別性に合わせて健康支援を行なう 身体・精神の双方から健康を支援する メンタルヘルスに主眼を置いてケアを行なう 労働生活以外のライフスタイル・家庭生活も考慮して支援する が含まれた。このうち 健康障害を持つ労働者が働けるように支援する には、「入院患者に対しても、その人の労働生活を視野に入れ入院治療が労働生活に及ぼす影響を考える」といった記述があった。

4) 【健康と労働の相互関連性】

【健康と労働の相互関連性】には、2つの看護のあり方 健康と労働の相互関連がよい循環となるように支援する 健康と労働の相互関連性から労働者を理解する が含まれる。なお、健康と労働の相互関連がよい循環となるように支援する とは、記述例に見るように、「労働生活の構成要素を総合的に見て健康障害を予防し改善するように働きかける」ということである。

5) 【健康・安全に関するセルフマネジメント】

【健康・安全に関するセルフマネジメント】には、2つの看護のあり方が含まれる。「QWLの向上を図るためには労働者の健康意識の向上に働きかけ自己管理能力を高める支援をする」という健康をセルフマネジメントできるように健康意識を高める支援をする、「労働者自身が自らの職場を自分達で守り変えて行くことができるような援助を展開して行くことがQOL, QWLの向上につながる」という健康との関連から労働・労働環境のセルフマネジメントを行なえるよう支援する である。

6) 【産業保健体制】

【産業保健体制】には、9つの看護のあり方 労働者の復職に向けて雇用主に働きかける 組織的に快適職場を形成する 労働者集団全体の健康意識を向上させる メンタルヘルスに対応できる体制を整える 法に則った安全衛生管理体制を整える 健康についての相談体制・健康維持を促進する労働環境を整える 受診・継続治療が必要な労働者にそれが可能となる体制を整える 関係機関・職種と連携して働きかける 労働環境改善に向けて事業主に働きかける が含まれる。

7) 【健康に関連する労働の概念】

【健康に関連する労働の概念】には、看護のあり方 労働に関する考え・価値観を理解して関わる のみが含まれている。

8) 【QOL/QWLの向上】

【QOL/QWLの向上】には、12の看護のあり方 長期的な視野に立ち計画的に支援を行なう 健康だけではなく労働も含めて自己実現できるように支援する 心身ともに健康でその人らしい労働生活を支えて行く 健康と労働能力の維持増進を行なう 労働の能率が下がることなく働くことができるようにする 労働者自身のセルフマネジメントとサポート体制の双方に働きかける 労働の継続を支援する 成熟期の人にとっての労働の意味をふまえて関わる いかなる健康レベルであってもその人らしい生活を送ることができるように支援する 労働者の人間性が尊重されるように労働の人間化を実現する 看護者自らのQWLの向上を考える 労働が変化の中でQWLの向上を目的とする看護のあり方も変わる が含まれる。

． 考察

1. 学生が考察した「QWLの向上を目的とする看護のあり方」と学習の枠組み

【労働・労働環境】に含まれる看護のあり方には、健康への悪影響がないように、という健康を守る観点と、快適さという観点からの労働・労働環境についての言及があった。労働による健康への悪影響を防止することは、労働衛生の大原則であるが、QWLを考えた時には、快適さという、より高次元の目標があることを捉えているものと考えられる。また、ここでは労働・労働環境に働きか

表2 学習の枠組みと学生が考察したQWLの向上を目的とする看護のあり方

学習の枠組み	QWLの向上を目的とする看護のあり方	記述例(要約)
労働・労働環境	健康への悪影響がないように適切な労働・労働環境を整える	QWLの低下につながる職場の健康を害する因子について情報収集し改善する 健康レベルはQWLにおけるバロメーターであるので、健康でいられる労働環境を作る
	労働者の健康と企業利益の両立を考慮して労働・労働環境を整える	休息・休養の保障が作業能率面から見ても有効であることを理解してもらうための活動をする 経験のある労働者が長く働くことは企業にとっても有意義であるので、それが果たせるように少しでも人に優しい労働にしてい
	職業上のストレスを軽減する	ストレス負荷という面も考慮した労働環境の整備を行なう
	労働者の個性を考慮して労働・労働環境を整える	健康問題があっても働きやすいようにそれぞれの人に合った労働生活が送れるように会社と話し合いながら労働の調整をする 労働者の特技や身体的・精神的側面を考え適正配置することもQWLの向上につながる
	快適さに配慮した労働・労働環境を整える	快適な環境で働けるように作業内容・作業環境を整える
個人要因・家庭要因	働くために健康の維持増進をめざし予防的な活動を行なう	労働者の健康状態を把握して労働環境や作業との関連を検討し健康の保持増進を行う 仕事上での質を高めるには本人が心身ともに健康であることが望ましいので予防も重視する 労働者が健康であることは企業にとっても労働者自身にとってもよいことなので健康の保持・増進をはかる看護をすることはQWLの向上につながる
	健康障害を持つ労働者が働けるように支援する	入院患者に対しても、その人の労働生活を視野に入れ入院治療が労働生活に及ぼす影響を考える 健康障害により労働が一時中断されたとしても労働がその人の生活の一部であるということを忘れずその人が満足して働けることを考えサポートする
	個別性に合わせて健康支援を行なう 身体・精神の双方から健康を支援する	専門知識を生かして個々の労働者に合う方法で健康管理をする 身体的・精神的側面の両方から健康をサポートする
	メンタルヘルスに主眼を置いてケアを行なう	労働者がよりよく仕事をするためには精神的な健康が必要であり思うことや悩んでいることを話してもらえ信頼関係をつくる ストレス状態の人が多くなっているため労働者のメンタルヘルスへ取り組む 職業上のストレスへの対応としてメンタルヘルスカケアを行なう
	労働生活以外のライフスタイル・家庭生活も考慮して支援する	労働・労働環境のみではなく価値観・信条を尊重し家庭要因や個人要因についても考えていく 労働生活以外の日常生活とのバランスがたもたれるように様々な生活の側面を把握する
健康と労働の相互関連性	健康と労働の相互関連がよい循環となるように支援する	労働生活の構成要素を総合的に見て健康障害を予防し改善するように働きかける 生活と労働の関連をつかみ個別性に即した労働・労働環境と健康生活を結びついていくように支援する 労働生活の多様な構成要素が関連しあっていることをふまえてすべてを視野に入れた看護をしていくことがQWLの向上につながる
	健康と労働の相互関連性から労働者を理解する	その労働者の健康と労働の相互関連性を考え理解する
健康・安全に関するセルフマネジメント	健康をセルフマネジメントできるように健康意識を高める支援をする	QWLの向上を図るためには労働者の健康意識の向上に働きかけ自己管理能力を高める支援をする QWLの向上を目的とするときには個々の労働者の健康管理意識をかえていかなければならない 自分自身で主体的に健康管理して行くためにコミュニケーションを重視して関わって行く
	健康との関連から労働・労働環境のセルフマネジメントを行なえるよう支援する	労働者自身が自らの職場を自分達で守り変えて行くことができるような援助を展開して行くことがQOL, QWLの向上につながる 労働の人間化ができるように労働者自身が意識するように促したり情報を与える 労働者が主体的に労働生活を送っていけるように意識向上をはかる

学習の枠組み	QWLの向上を目的とする看護のあり方	記述例(要約)
産業保健体制	労働者の復職に向けて雇用主に働きかける	健康障害をもつ労働者が元の生活に帰れるように会社に働きかける
	組織的に快適職場を形成する	専門職, 事業所が協力して快適な職場作りのために, 作業環境, 作業内容, 健康管理, 労働者の教育を行なう
	労働者集団全体の健康意識を向上させる	企業全体の健康意識を高め労働者が一体となって健康の保持増進につとめる
	メンタルヘルスに対応できる体制を整える	メンタルヘルスのために相談できる場や休息のとれる場を設けていく
	法に則った安全衛生管理体制を整える	労働生活を支えるために衛生委員会の設置等体制を整える
	健康についての相談体制・健康維持を促進する労働環境を整える	疾病にかかった時のための制度, サポート機関の利用など労働者を守るための体制の整備を促進するように働きかける
	受診・継続治療が必要な労働者にそれが可能となる体制を整える	健康診断の結果, 要精密検査となった場合に受診できる体制をつくる
	関係機関・職種と連携して働きかける	企業と労働者, 医師と労働者の橋渡しの役割を果たす
	労働環境改善に向けて事業主に働きかける	労働者自身には対処しきれない労働・労働環境について事業主に働きかける
健康に関連する労働の概念	労働に関する考え・価値観を理解して関わる	労働者個々の仕事に対する思い入れや責任感の違いなどを理解する
QOL/QWLの向上	長期的な視野に立ち計画的に支援を行なう	一時的なものではなく10年・20年先も働く人々が健康でいられるように計画的に行なう
	健康だけではなく労働も含めて自己実現できるように支援する	生活の手段としての労働だけではなく, 労働者その人自身がその人自身の持っている能力を十分に発揮し, 生き生きとして労働生活が送れるように支える
	心身ともに健康でその人らしい労働生活を支えて行く	どの領域で働く看護師であっても労働者を成熟期の働く人であるということを理解し労働や生活に即した援助を行いその人が望むその人らしい生き方を支える
	健康と労働能力の維持増進を行なう	QWLを向上させていくには労働者の健康と労働能力の維持増進が大切である
	労働の能率が下がることなく働くことができるようにする	労働の能率を下げることなく働くことができるようにすることもQWLの向上につながる
	労働者自身のセルフマネジメントとサポート体制の双方に働きかける	QWLを維持するには, 労働者自身が自己管理することと個人の努力では解決できない問題と両方あるので双方に働きかける
	労働の継続を支援する	健康を守りながら働いて行くこと, 疾病を持っていても働き続けられること, それが現在の生活を維持して行く必須条件であるのでそのための看護を行なう
	成熟期の人にとっての労働の意味をふまえて関わる	仕事をすることによって賃金を得て生活が成立していることを念頭に置き生活の背景も広く捉えながら関わる
	いかなる健康レベルであってもその人らしい生活を送ることができるように支援する	QWLの向上を目指す看護の最終目標はいかなる健康レベルにあってもその労働者がその人らしい生活や労働の場に戻れたり適応できたりすることである
	労働者の人間性が尊重されるように労働の人間化を実現する	賃金と引き換えに労働を提供するだけではなく働く人々の人間性が尊重され仕事の内容・進め方が人間性を尊重したものにする
	看護者自らのQWLの向上を考える	ケアを提供する看護者自らのQWLの向上を考える
	労働が変化の中でQWLの向上を目的とする看護のあり方も変わる	労働が変化の中でQWLの向上を目的とする看護のあり方も変わる

けていくためには, 労働者の健康と企業利益の両立が必要であることも捉えられている。

【個人要因・家庭要因】では, 働くためには健康維持が必要であるとの考えの下に, 予防的活動を行なうことが捉えられている。健康の維持増進は看護学生であれば, 基本的に学んでいることではあるが, 働くためにはという視点が見出せていることに意味があると考え。

また, 健康障害を持つ労働者が働けるように支援する看護が提示されている。講義開始前に実施する労働者イ

ンタビュー⁵⁾, 開始早期に実施される事業所見学⁶⁾では, 健康と労働の関連についての気づきは促進されるが, その時点ではほとんどが労働から受ける健康への影響についての気づきであった。その後の授業展開の中で, 理解を促進することが課題であったが, 今回の15回の講義終了時点では, 健康が労働に及ぼす影響についても理解が深まったことが確認できた。さらに, 記述例にみるように, 「労働の場で看護を展開する場合に限らず, 入院患者に対しても, その人の労働生活を視野に入れ入院治療

が労働生活に及ぼす影響を考える」といった気づきがあった。本学の産業看護学教育が、成熟期の働く人を対象とした看護方法として、労働の場において展開される看護に限定せずに行なわれていることから考えて、目的になっているものと考ええる。

【健康と労働の相互関連性】については、労働と健康の関連が単独ではなく複雑にからみ合い、循環していることをふまえて看護を展開する考えが提示されている。記述例にあるように、労働生活の構成要素を総合的に見ることを重視している。この考え方には、最終レポートの前に各自インタビューした労働者の事例を題材に、健康と労働の相互関連性についてグループワークを行ったことが生かされているのではないかと考える。

【健康・安全に関するセルフマネジメント】に含まれる看護のあり方は2つのみであった。この2つの看護のあり方は共にセルフマネジメントであるが、マネジメントするのが健康そのものであるのか、労働・労働環境であるのか、という違いがある。ここでは、本科目の学習目的・目標から考えて、労働・労働環境のセルフマネジメントが提示されたことの重要性に言及したい。なぜなら、【産業保健体制】の中で事業主に対し働きかけ、【労働・労働環境】を改善したとしても、労働者であるその人自身が労働・労働環境への意識を高め、主体的に取り組まないとQOL/QWLには結びつかないという本質が理解されているからである。

【産業保健体制】には、比較的多くの看護のあり方が含まれた。組織的な快適職場形成や、労働者集団全体の健康意識向上などを視野に入れており、体制づくりについて考察されている。また、看護職者だけではなく、関係機関・職種との連携も提示されている。

【健康に関連する労働の概念】については、各労働者が自分の中に持つ、労働に関する考え・価値観を理解して関わる事が示された。

【QOL/QWLの向上】では、12の看護のあり方が示された。前述したようにQWLの向上を目的とする看護のあり方は、学習目的として設定するほど抽象度の高い課題であり、決まった正解があるわけではない。結果として様々な看護のあり方がここに示されたものと考ええる。この点については、考え方の幅の広さを学生に示す機会があれば、なお、学びが深まったのではないかとと思う。

2. 「QWLの向上を目的とした看護のあり方」の記述が無かった学生について

看護について記述はされているものの、それらの看護がQWLの向上とどのように結びついていくのか、記述していない学生が86名中27名(31.4%)いた。3割強のこれらの学生は、事業所で行なわれるべき看護、労働衛生の目的から見た基本的な看護についての記述はあったものの、QWLの向上を目的とした看護についての考察であるということを十分に理解していなかったということになるだろう。

QWLの向上を目的とした看護のあり方を学ぶことが、本科目の学習目的ではあるものの、前述したように、QWLの概念について講義の中で触れてはいるが、その向上を目的とする看護のあり方については、取り上げていないということがあり、この課題については、学生が個々に考察しなければならない。QWLについては、山勢ら⁷⁾の全国の看護教員の産業看護に対する認識調査の結果として、知っている看護教員は4割に満たなかったと報告されており、看護教育界の中での認知度は低い。非常に深遠なテーマでもあるが、QWLの向上を目的とする看護のあり方については、産業看護の実践の中でも十分な論議が尽くされている課題ではない。担当教員間でも、1年次の学生には難しい課題ではないかと危惧する面もあった。しかし、今後の授業展開を考える上で、この時点での学生の理解を知りたいと考えて課題を提示した。その点では、記述の無かった3割の学生がいたことを問題とするよりも、7割弱の学生がQWLの向上を目的とする看護のあり方を考察し得たことを評価したいと考える。

3. 学習の枠組みから見た今後の課題

今回の分析より、学生は、15回の講義終了時点で、学習の枠組みを網羅しQWLの向上を目的とする看護のあり方について考察し得ることが確認できた。同一学生についての分析ではないが、これまで第1報から3報において報告したように、労働者インタビュー⁸⁾では健康と労働の相互関連性、作業環境・作業態様の体験学習⁹⁾での擬似労働者体験からは人と労働・労働環境の双方に働きかける看護方法を、事業所見学¹⁰⁾では健康と労働の相互関連性ならびに人と労働・労働環境の双方に働きかける看護方法を学んでいることから考えて、授業開始時点

から終了までの間に、学習目標を着実に通過し、学びを深めたと考えられるのではないか。

しかし、QWLの向上を目的とする看護のあり方まで考えることが難しかったと思われる学生も多いことについては、授業展開の工夫が必要である。考察を深めるための教育的支援として、QWLとは、あるいはQWLの向上とは、というテーマについて考える段階を設けることも必要と考え、平成15年度よりグループワークを導入している。その成果については、今後また検討し報告していきたい。

おわりに

QWLの向上を目的とする看護のあり方、という難しいテーマに対し、1年次の学生としては、精一杯考察したものと思う。

第1報から引き続いて成熟期看護方法1の授業内容の分析を行い、15回の授業最終時点で学習目的に到達し得ることが確認できた。しかしながら、未だ試行錯誤の過程にあり、教育構築中である。今後、さらに検討を積み重ね研究を続けていくことが必要である。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、記録を使用することについて快く承諾してくれた学生の方々に感謝します。

引用文献

- 1) 上野美智子, 梅津美香, 奥井幸子: 産業看護学教育の構築 第1報 - 学生による働く人の仕事と健康の関連に関するインタビューの分析 -, 岐阜県立看護大学紀要, 2(1); 124-130, 2002.
- 2) 梅津美香, 上野美智子, 奥井幸子: 産業看護学教育の構築 第2報 - 作業環境・作業態様の体験学習を通じて学生が考察した看護援助 -, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1); 82-88, 2003.
- 3) 上野美智子, 梅津美香, 奥井幸子: 産業看護学教育の構築 第3報 - 事業所見学における学生の学びと授業への活用 -, 岐阜県立看護大学紀要, 4(1); 73-79, 2004.
- 4) 前掲 1).
- 5) 前掲 1).
- 6) 前掲 3).
- 7) 山勢善江, 延近久子, 石松直子: 看護基礎教育における産業看護に関する教育の現状と課題, 産業医科大学雑誌, 23

(2); 203-215, 2001.

8) 前掲 1).

9) 前掲 2).

10) 前掲 3).

(受稿日 平成16年2月18日)